

2. 私を「映画評論家」にした 辻 邦生先生

私が学習院大学の旧・フランス文学科に入学したのは、1977年のことです。当時の仏文科には、福永武彦、白井健三郎、大久保輝臣、豊崎光一など、すでに鬼籍に入られた名物教授がまだ在籍され、むろん辻 邦生先生はそのなかでもひと際輝かしい名前でした。しかし、私にとって、あの『背教者ユリアヌス』の作家！ というイメージがあまりにも強烈で、親しくお話するような師弟関係にはなりようがなく、最初はただ授業をありがたく拝聴していました。

その頃いちばん印象に残っているのは、たしかメリメの短篇を講読した授業でのことです。辻先生はひとつの授業を前半と後半に分け、真ん中に10分ほどの休憩時間を設け、そこで授業とは直接関係がないよもやま話をする習いでした。そこで先生はふとこんな言葉を洩らしたのです。

「ぼくは吸血鬼ですからね。こうして授業で皆さんの若いエネルギーを吸いこんで生き延びているんですよ」

当時、辻先生は50代前半、大作『フーシェ革命暦』に心血を注いでいた時期です。そんな真剣勝負の表情を先生は教室ではただの一度も見せませんでした。つまり、命をすり減らす執筆活動のなかで、呑気な学生たちとの付き合いは、先生にとって精神的なオアシスのような意味があるのかなと思ったものです。

辻先生と個人的に話をするようになったのは、私があるフランス語弁論大会で優勝したことがきっかけです。先生はそのことを耳にされたらしく、研究室に私を呼んで、「優勝記念のお祝いに1冊本をプレゼントしてあげよう、なんでも好きな本をいいなさい」とおっしゃいました。そのおりに、先生も私も大好きな映画の話で盛り上がり（たしか『網走番外地』の話でした）、それから廊下ですれ違ったりするたびに、先生は気に入った映画のタイトルを教えてくださいようになりました。

私が東京大学の大学院に進んでからは辻先生とお会いする機会はほとんどなくなってしまったのですが、辻先生の映画エッセーが各所に発表され、筋金入りのシネフィルぶりにしばしばびっくりさせられました。

その後、フランスに留学しているとき、突然パリ郊外の学生寮に日本の「マリ・クレール」というファッション雑誌の編集長から国際電話がかかってきたことがあります。いきなり映画女優のジューン・パーキンにインタビューしてくれという依頼なのでうろたえましたが、辻先生からのご紹介なのでぜひ、という言葉に背中を押されて、パーキンの自宅まで出かけ、生まれて初めてフランス語でのインタビューをしました。この記事が好評で、私は帰国後も映画



辻 邦生
『私の映画手帖』
(1988年、文藝春秋)



中条省平
『中条省平の秘かな愉しみ』
(2003年、清流出版)

評論の仕事をするようになります。というわけで、私を「映画評論家」にしたのは、辻 邦生先生なのです。

フランスから帰って学習院大学に勤め、私は辻先生と同僚になったわけですが、大学よりも試写会で顔を合わせるが多かったように思います。試写会の前に二人でラーメンを食べながら、映画の話をしたこともあります。辻先生は映画なら何でも見る、映画のグルメ（美食家）ならぬグルメ（大食家）でしたが、じっさいにも健康家で、おやつ代わりのラーメンなどべろりと平らげていました。

そんなご縁に導かれて、新潮社の「辻 邦生全集」第19巻では、膨大な辻先生の映画評論から200ページをこえる「辻 邦生 映画クロニクル」を編むという仕事をさせていただきました。辻先生が映画を語るときの情熱的な笑顔を思い浮かべ、一緒に映画を見るような至福を味わう経験でした。

(学習院大学文学部教授 中条省平)

3. わが師・辻 邦生先生

辻先生と毎週お目にかかるようになったのは、フランス文学科で私が助手をしていたころだ。先生は大学院の文学演習を担当しておられ、授業の前後に北2号館5階の研究室に立ち寄られた。先生のにこやかな笑顔、すがすがしいお声で、雰囲気が一変する。授業後は共同研究室で学生に囲まれてコーヒーを飲みながら談笑なさるときもあれば、哲学科で同じ時間に授業を持っておられた美術史家で奥様の佐保子先生と待ち合わせということもあった。

先生のお気に入りの教室は東別館だった。淡いサイダー色の木造洋館の「史料館」と北2号館のあいだを抜けた奥にある、一軒家風の建物である。木々に埋もれて目立たないので存在すら知らない方もいるかもしれないが、機会があればぜひ中に入ってみたい。ステップの中央がすり減った螺旋階段。格子窓。時が止まったような静寂、匂い、と同時に現役で使用されている建物の力も感じられるはずだ。「一種の地霊のようなものは何となく分るような気がしていた」（『地の霊 土地の霊』）と先生はお書きになっているが、東別館にはきつといい（気）が流れているのだろう。

いつものように研究室にいるとき、「一緒に翻訳をしませんか」と辻先生が誘ってくださった。クリストフ・パタイユという若い作家の、ヴェトナムを舞台にした歴史小説『安南』である。詳しくは先生のエッセイ集『微光の道』に書かれている。私は文学作品の翻訳は初めてで、シンプルな文

体を訳せるのか不安だったが、「小説の翻訳は雰囲気をつかむことが大事です」というのが先生からの唯一のアドバイスだった。

いざ訳し始めると予想以上に時間がかかった。辻先生が見てくださることを意識していたからだろう。実際、先生はじつに丁寧に添削してくださった。シンプルな、ともすれば単調な文章は、先生の手直しが加わると息が吹き込まれた。

私はそれまで知らなかった翻訳のこの上ない喜びを知った。そして先生に支えていただき、翻訳者として育てていただいた。

「作家の勘だよ」、どうしてあのとき先生は私に声をかけてくださったのか、という話になると、先生は笑ってこうおっしゃっていた。

*

まもなく7月29日、先生が滞在中の軽井沢で急逝されて10年になる。

辻先生が学習院にいらしたところを知っているのは私と同世代以上の教職員だけとなった。2004年に史料館主催の『辻 邦生展』が開催されたときには、学生を誘って一緒に見学に行った。学生たちは多角的な展示を通じて、先生の膨大な著作、並外れた行動力を実感したようだった。月日の経つのは早く、このときの学生たちはもう学内にいない。

今回、没後10年の節目に軽井沢高原文庫と豊島区民センターで辻 邦生展が開催される。軽井沢は少し遠いけれど、池袋のほうはお見逃しなく！

(学習院大学外国語教育研究センター教授 堀内 ゆかり)



東別館



東別館階段